

不妊 諦めの時

—— 子供イコール幸福とは限らないお話 ——

Yamada Kimiko

山田 貴美子

■ 目次

前書き	7
運命の赤い糸	10
教育の違いは人間性の違い	12
第1話 他人が全て我が子	26
石川繁子先生の場合——子宮ガン	26
第2話 我が子が全て	30
渡辺りつ子さんの場合——子宮頸がん	30

子供イコール幸福とは限らないお話	36
第3話 契約家族	36
加奈子の場合―排卵障害	37
第4話 ひとりで生きる力を下さい	59
洋子の場合―子宮内膜症・卵巣チョコレート腫瘍合併症	59
第5話 天使と呼べるまで	74
葉月の場合―卵管閉塞	75

人生いろいろ	97
第6話 ぼくって何？	103
清彦の場合―無精子症	104
第7話 天国からの手紙	116
昇の場合―貧精子症	117
高齢での教育問題、家庭の事情	130
初めの一歩	133

第8話 ようやく出会えたね……………139

●女性としての喪失感……………139

●卵管通水治療……………141

●不毛感、帰属意識の喪失感……………142

●生命の断絶、罪の意識、新しい命願望……………143

●体外受精がもたらしたもの……………147

●カウンセリングの必要性……………149

前書き

「ねえ、孫ってどんな感じなの？」

私の実母が幼な友達にそう尋ねられて、言葉に窮したと言う。実母のお友達には、4人のお子様がいらっしゃる。弁護士、大学教授、医師と社会的地位にも優れ、若い時は実母の方が羨しいと思う存在だった。なのにお孫さんが、おひとりもいらっしゃらない。

私は元々、「不妊」は夫婦だけの問題だと考えていない。子供が抱けないと言うことは、双方の両親が孫を抱けないにつながるのだ。悲しみは確実に広がっている。

だが最近、孫抱きたさに自分のお腹を貸す実母が増えてきた。世で言う代理出産、祖母版である。考えさせられた。

(そこまでするか?! しなければならぬか?!)
と。

親のため、世間体のため、欲のため、何故そこまでしなければならぬのか?! 子供がない、孫がないとは、そんなに恥ずかしいことなのか。一体誰に、何に対して、恥なのか?!

「子供がいて当然!」

と言う風潮がそもそもいけないのだ。いろんなスタイルの家族があつていい。

その人の人生は、その人のものである。結局「どう生きたか」が大事であつて、それを評価するのは、世間でもなく、他人でもなく、自分自身のみである。

子供がいないと、「子供のいない人」で評価されてしまう。けれどもそこまで行きついた道程は、自分で納得できるものであればよいのではないだろうか。

不妊治療をした人は、辛さ悲しさから見えてくるもの、学んだものがある分、確実に人間性、人生観が違ってくる。どんな結果であろうと、次の人生に必ず生かされるし、生かさなければならぬ。

人は死ねば、どんな有名人でも、翌日から忘れ去られていく。あなたに「子供がいた、

いない」なんて、誰も覚えていない。ならば直更「自分がどう生きてか」が重要である。人生は他人と比べるものではないし、他人に評価されるものでもない。

私はつい最近、「余命一ヶ月の花嫁」(マガジンハウス)を読んだ。乳がんを宣告された長島千恵さんは、完治したら人の手助けになれる。自分が苦しんだ分、もつと人に優しくなれると確信していた。人は挫せつし初めて痛みが分り、人のために尽くそうとする。千恵さんにその後はないが、私達不妊者は、生命の危機にさらされることはないのだ。確かに子供を諦める「タイムリミット一ヶ月の女性」になる可能性はあるだろう。でも生き続けられる。

決して子供イコール幸福ではない。しかし不妊治療は納得いくまですべきである。子供の母は、あなたただけだ。

あなた自身が明日抱けるかもしれない我が子の為に納得して!、と願う。

子供イコール幸福とは限らないお話しをする前に、ある運命の糸をご紹介したい。

運命の赤い糸

私の長女は体外受精児である。日本でまだ一人いるかいないかのひとりだ。当時（今でも）不妊の最大の敵は『高齢』と言われる四十三才で産まれた「奇跡の子」である。娘は大病もせず、幼稚園に入園。卒園したのは入園した幼稚園とは違う「こぼと幼稚園」。卒園間近に娘は転園したのだ。何故こうなったのか、運命の糸は娘が生まれる前に逆のぼる。

「こぼと幼稚園」の名前の由来は、私は知らない。

私はある日、仕事へ行く途中の駐車場で「キーキー」と鳴くヒナ鳥を見つけた。辺りは高層ビルで、木らしきものはなく、どこから落ちたのか分からなかった。生まれたばかりで飛ぶこともできない。

私は丁度不妊治療の最中で、中々良い結果が得られずにいた。鳥の子であろうが、猫の子であろうが、捨てられている生き物は、何でも拾って育てた。多分、気の毒な生き物を見捨てなければ、私自身も神に見捨てられずきつと救われると思ひ込んでいたのだろう。

そのヒナ鳥も拾って帰った。「キー」と鳴くから初めは分からなかったが、鳩の子だった。何故か鳩の子を拾って間もなく、私は妊娠した。

流産を繰り返していたので、私は寝てばかりいた。枕元に「ポッポ」と名付けられた鳩を置いて世話をした。

「鳩は汚いから、赤ちゃんに悪い。捨なさい！」

と、友達に何度も言われた。けどコウノトリではなく「ポッポ」が赤ちゃんを運んできたような気がして、捨られなかった。

同じ頃、主人が拾ったロシアガメのゴミ子が、ベランダで卵を産んだ。ゴミ子が涙とよだれを垂らしながら、苦しそうに卵を産むのを、私は窓ガラス越しに見ていた。

続けと言わんばかりに、ポッポが卵を産んだ。「へえ、女の子だったの」と思っていたら、

私のお腹の子も「女の子です」と診断された。

私が長女を出産すると、入れ替るようにゴミ子は亡くなる。推定年数三十年以上と言うから、かなりの老齡らしい。

「よかったね、子供が産めて。女に生まれたんだから」

私はそう言葉をかけ、ゴミ子は幸せだったと信じた。ポツポの方は、今でも私の家に家族の一員として暮らしている。

そして長女、眞子は幼稚園に入園。人生の荒波が始まるのである。

教育の違いは人間性の違い

娘は初めから「こぼと幼稚園」へ入園の予定だった。私達家族は「こぼと幼稚園」のすぐ近くに住んでいたからだ。

ある日突然、運命の歯車が狂い始める。